



天使たちの華劇

暁の天使たち 外伝2

茅田砂胡

Sunako Kayata



立ち読み
専用



D 挿 口
T 画 絵
P

ハ 鈴
ン 木
ズ 理
・ ミ
ケ 華

一般市民のすすめ



ジエームスが惑星アルバンで育ての母親と再会し、母親の恋人に対抗心を燃やして帰ってきた翌々日。

授業を終えたリイが自室に戻ると、端末に意外な伝言が残されていた。

プライツイヒ校のヴァンツァーからだった。

「相談したいことがある」

と言うのである。

しかも、詳しいことは直接会って話したいので、早いうちに学校へ来てもらいたいと言うのだ。

珍しいことだと思いつながら、リイは明日そちらに行くことと返事を書き、待ち合わせの場所を決めた。

そして翌日の放課後、リイはログ・セール大陸のプライツイヒ校まで出向いたが、一人ではない。

シエラが一緒だった。

一人で来いとは言われなかったし、今のシエラは何があってもリイから離れない決意を固めている。

待ち合わせに指定された学生食堂に行ってみると、食堂の奥まった壁を背にして、黒髪の少年は入口を見渡せる位置に腰を下ろしていた。

隣には明るい髪、くつきりと眼の大きな少年が座っている。

この二人が並んでいるだけでも非常に目立つのに、そこへ金銀天使のような二人が加わったのだから、人目を引かずにいるわけがない。

二人に気づいた食堂の生徒たちは食事の手を止め、おしゃべりも中断して、ぽかんと眼を見張っていた。リイはそうした視線には一向にかまわなかった。

机に歩み寄って腰を下ろすなり本題に入った。

「どうした？」

ヴァンツァーはいつもの無表情でリイとシエラを見つめてきた。

急に呼び出した割にはさほど変わった様子はなく、いつもと同じ淡々とした口調で言った。

「少しばかり、困ったことになった」

「だから、なんだ？」

「単位を落としかねない事態だ」

「なに？」

首を傾げたリイに、レティシアが説明した。

「あれだよ。あんたに急に呼び出された次の日が小論文の提出期限だって、こいつ、言ってただろう」

「じゃあ、その期限に間に合わなかったのか？」

「いや、ちゃんと提出した」

では何が問題なのかというと、担当の教授がその論文に『不可』の評価を下したというのだ。

早い話が落第である。

「まずいことに、その論文がその講義の最終試験を兼ねてたんだと。論文が落第つてことは講義自体も自動的に落第つてことだ」

またレティシアが解説する。

確かにそれなら単位を落とすことになるだろうが、それと自分が呼ばれたことと何の関係があるのか、リイにはさっぱりわからなかった。

首を捻りながらも黙っていると、ヴァンツァーが相変わらず感情のない声で言った。

「なぜ不可なのか、俺には理解できなかった。あの小論文は及第をもらえないほど程度の低いものではなかったはずだ。自分ではそう思っている」

そこでヴァンツァーは教授に面と向かって落第の理由を問い質したらしい。

すると、教授はこう言ったそうだ。

「きみが非常に優秀な学生であることを認めるのはやぶさかではない。しかし、こんな引用文だらけの文章は断じて論文と認めるわけにはいかない」

リイはもちろん、シエラも眼をぱちくりさせて、思わず問いかけていた。

「引用文だらけ——というത്？」

「丸写しって意味だ」

またもレティシアが答え、リイはヴァンツアーに向かつて訊いた。

「丸写しにしたのか？」

美貌^{びぼう}の少年は首を振った。

「そんなつもりはない。資料の丸写しでは論文とは言えないからな」

もつともな話^{おと}だった。第一この男はそんなこともわからないほど愚^{おろ}かではない。

リイはますます首を捻^{ひね}って言ったのである。

「どうもよく話が見えないんだが……いったい何が問題なんだ？」

ヴァンツアーはちよつと間をおいて話を続けた。

「俺には納得できなかった。資料を引用した部分もあることは確かだが、そもそも何の資料も使わず、一冊の参考文献^{ぶんけん}もなしに論文など作成できるわけがない。使った文献は末尾に明記しているし、決して丸写しではなく、そこに自分なりの議論を展開して解釈を加えたが、教授は提出された論文を見る限り、

そんな形跡は認められないという」

再びレティシアが言う。

「見解の相違^{さいてい}って奴だな」

「それで？」

「俺が食い下がると、教授は妥協案を出してきた。

そこまで言うなら場所を変えて、この問題について徹底的に論議しようと言ってきた。具体的に言う、学校では都合が悪いので、ぜひ一度、自分の家まで遊びに来るようにとのことだった」

リイにはまだわからなかったが、シエラのほうが察しがよかった。

何とも言えない顔になって問いかけた。

「まさか……？」

「そのまさかだ」

「何の話だ？」

不思議そうに問い返したリイに、ヴァンツアーは依然として感情のない声で説明したのである。

「討論だけではすまない。恐らくそこで食事になる。

食事だけでもすまない。恐らくその後は酒になる」

レティシアが後を受けて、さりとて言った。

「そしてたぶん酒の後は単位が欲しければ寝室まで同行しろってことになる」

ようやく事態を理解したリーの顔こそ見物だった。

何気なく話していたヴァンツァーとレティシアが反射的に身構え、隣に座っていたシエラがあまりの怒気の激しさに怯んだくらいだった。

「その教授……女か？」

唸るようなリーの言葉をヴァンツァーはあつさり

否定した。

「いいや、れっきとした妻子持ちだ」

「だったらかまうことはない。その変態の顔の形が変わるくらいぶん殴ってやればいい」

「それはできない」

「なぜ？」

「単位が取得できなくなる」

リーはまじまじとヴァンツァーの顔を見つめた。

それこそ穴が開くのではないかと思うほど凝視し、ほとんど殺気の籠もった声で問いかけた。

「おまえ……まさかと思うが『単位』と『任務』をごっちゃにしているんじゃないだろうな」

「そんなことはない。単位と任務は全然違う」

どこまでも真面目に答えたヴァンツァーだった。

「任務に失敗すれば命がないが、単位は落としても死ぬことはないから——大違いだ」

レティシアも真顔で頷いた。

「まったく、大違いだぜ」

「とはいっても、今の俺が学生という身分であり、学生の自分は学業にあるとされている以上、落第は避けねばならない。特にこの単位は落とせない」

「それで？ どうする気だ」

「単位の取得にそれが必要だと教授が主張するなら特に問題はない。応じればすむことだ」

リーが暴れ出さなかったのはほとんど奇跡だと、シエラはそつと考えた。

しかし、こんなふう^{ひじみ}に沈黙して瞳を光らせている
リイはある意味、怒鳴^{どな}り散らすより遙^{はる}かに恐い。

「問題ならあるぞ。大ありだ。おまえはその変態が
好きなのか？」

ヴァンツァーは瞬^{まばた}きして首を傾げた。

「すまない、王妃。意味が理解できない」

「王妃はよせ。おまえはそいつと一夜を共にしても
かまわないのかと訊いてるんだ」

「無論、単位の取得に必要ななら」

「単位が絡^{から}んでいなかったらどうなんだ。そいつと
情を通じたいと思うのか」

「単位が介在していなければ応じる理由は何もない。
時間の無駄だ」

「おまえ自身の感情はどうなんだと訊いてるんだ。
好きでもない奴と関係することに抵抗はないのか」

ヴァンツァーはますます首を捻^{ひね}った。

その端麗^{たんれい}な顔には本当に不思議そうな、訝^{いぶか}しげな、
リイが何を言っているのかまったく理解できない、

そんな表情が浮かんでいた。

「おかしいことを言う。そういうことは好き嫌いで
するものではないだろう？」

やっと問題点がはっきりしたリイは獐^{どう}猛^{もう}に笑って
相手に迫ったのである。

「いいか、黒すけ。教えてやるが、そういうことは
普通は好きでするものなんだ」

対するヴァンツァーは薄^うく微^び笑^{しょう}して首を振った。

「世間一般常識でそうだということは知っているが、
俺にはその感覚はわからない。必要か、無用なのか、
肝^{かん}心^{じん}なのはそれだけだ。そして必要だと判断したら
行使するだけだ」

リイが壮絶な眼でシエラを睨^{にら}んだので、シエラは
冷や汗を掻^かいて身を縮めた。

緑の瞳はおまえもそうなのかと無言で責めていて、
答えようがなかったのだ。

そしてヴァンツァーは依然として感情のない声で
続けたのである。

「どんな関係になろうと問題があるとは思えない。

後で黙らせてしまえば済むことだからな」

リイは苛^{いら}立たしげに舌打ちした。

この場合ヴァンツァーが使う『黙らせる』という言葉の意味は一つしかないからだ。

「そんな物騒な手段を考える前に最初から断るなり、そいつをぶん殴るなりすればいいだろうが。それが世間の一般常識でもんだ」

「それでは単位が取得できない」

「だからって、自分から誘いに乗っておいて、用が済んだら強制的にあの世に送っちまうのは、いくら相手が変態でもやりすぎの部類に入るぞ」

「わかっている」

意外にもヴァンツァーは素直に頷いた。

「こんな個人的な事情で技を振るうのは実のところ不本意だ。回避できるならしたいが、今回ばかりは仕方がない。単位の取得にはこの取引が必要であり、その後はきちんと処理しておかないと痕跡^{こんせき}が残る」

「痕跡？」

「こちらには向こうと違って永久に残る記録映像というものがある」

「それが？」

レティシアが声を低めて言った。

「あんたの言う一夜の真つ最中を記録した映像だよ。その教授、そういう趣味らしいぜ」

歯^もぎしりと共にリイが洩^もらした唸り声は、どんな猛獣も尻尾を巻いて逃げ出すほど物騒なものだった。

「そいつ……正真正銘^{しょうしょうめい}の変態か？」

「加えて常習犯なんだ。表沙汰^{おもてざた}にはなつてねえが、これまでに食い物にされた奴がずいぶんいるらしい。その連中もそんな証拠を握られてるから泣き寝入りするしかないのかと思いきや、そうでもないんだとお相手をした分のご褒美^{ほうび}ははずんでくれるんだとよ。ヴァッツの場合は単位だが、競争率の高い学部への進学だの就職の世話だの、結構まめなんだそうだ」

金の天使^{てんし}転じて黄金の獣^{けもの}は忌々^{いまいま}しげに舌打ちし、

訝しげな表情でレティシアを見た。

「おまえ、いったいどこでそんなことを聞き込んで来るんだ？」

「難しいことじゃねえよ。情報収集の基本は人間だ。特にこんなまとまった集団の中ではない」

だからといって、まさか真正面から教授の性癖せいへきについて尋ねるわけにもいかない。

レティシアはただ、生徒の集まっている場所で、その教授の話題を頻繁ひんぱんに出しただけだと言った。

教授の名前はミハエル・ブフナー。四十七歳。

専門は社会経済学。学者としてはまだ若手だが、その世界では知らぬ者としてない著名な人物であり、政財界の人間に助言を求められることも多いという。連邦大学でも専攻科の生徒を主おもに担当しているが、多くの生徒と接したいという教授本人の希望により、大学・高校の一般課程も担当している。

知名度に比例して生徒たちの人気も非常に高く、ブフナー教授の授業はいつも学生で一杯だという。

「それだけに目立つぜ。ほとんどの連中がそのことを肯定的きうていに話す中で、名前を出した途端に顔をしかめて席を離れる奴がいるってのはな」

本人は顔には出していないつもりだったろうが、レティシアがそれを見逃すはずもない。

さりげなく近づき、あらためて話を持っていた。本当なら一つの情報を聞き出すにはもつと時間を掛けるものだが、今は悠長ゆうちやうにやっている暇はない。「かなり露骨ろこつに首を突っ込んだぜ。おかげで余計なことまで怪あやしまれたけどな。今回に限ってはそれが収獲しゅうかくにつながった」

「余計なことっていうのは？」

「そりゃあ、俺もこれでかなりの美少年だからさ」

「自分で言うか」

リイは呆あきれて言ったが、レティシアは真剣だった。「ほんとのことさ。話を聞けたのはこの顔がものを言ったらしいぜ。俺も教授の被害にあったのかつて思われたんだよ」

「おまえ、そんな話を白昼の校内でしてたのか？」
 そういう今も白昼の食堂なのだが、レティシアは首を振った。

「ことがことだからな。大きな声じゃ言えねえよ。そいつから話を聞き出すのは結構、骨だったんだぜ。何しろその教授、学校の信頼絶大たるものがあつて、政治家連中にも顔が利くとかで、下手に睨まれたら学校から追い出されかねないんだと」

実際、レティシアに話をしてくれたその生徒は、近くに人気がないことを神経質なほど確かめてから、真顔で忠告してくれたそうだ。

「こんなことを話しても誰も信じてはくれないが、そういう心当たりがあるなら悪いことは言わない。ブフナー教授には近づかないほうがいい」

あいにく手遅れだった。こちらが近づかなくても向こうが熱心にお近づきになりたがっているのだ。ヴァンツァーが淡々と言う。

「今の俺は学生であると同時に、善良な一般市民で

なければならぬ立場だ。取引の証拠となる記録を残しておくわけにはいかない。そのためにも教授を沈黙させて記録を回収することが望ましい。ただし、向こうでなら自分の仕事が見破られることは絶対にないと断言できるんだが、こちらの警吏は俺の知らない科学捜査技術を持っている。迂闊な真似をして殺人犯人として捕らえられるのは避けたいところだ。——そこで相談なんだが、どういう手段を用いれば警吏の眼を眩ますことができるのか、知っていたら教えてほしい」

リイはため息をついた。

とても善良な一般市民の相談する内容ではないが、本人が真面目なだけに始末が悪い。

「おまえ、おれが本調子じゃないことを感謝しろよ。顔の形が変わってるところだぞ」

この言葉にレティシアが反応した。

「なに？ あんた、まだがたついてるわけ？」

「ほとんどいいんだけどな。時々、発作が起きる」

あつさり答えて、リイはレティシアに眼をやった。

「おまえにその話をしてくれたのは誰だ？」

「セム大学の薬理講座で一緒の奴。一時的にだけど、俺の同級生ってことになるのかな」

身分は一応高校生のレティシアだが、この惑星は学ぶ意欲と能力があれば年齢や垣根にこだわらない。

レティシアは所属する高校で一般教科を学びつつ、各大学の医学講座も受講している。それというのも高校にはレティシアの学びたい医学がないからだ。

「その同級生もその変態の毒牙に掛かった口か？」

「いいや、餌食になったのはそいつの友達だよ」

「本当に？」

問題が問題だけに被害者が自分だとは言えずに、友達ということにしたのではないかと思つたのだが、レティシアは自信ありげに首を振った。

「違うね。自分のことを話す時の反応じゃなかった。だいたい、そいつ、面相は悪かねえが、細長くって青白くって、あの教授の好みじゃねえよ」

「わかるのか？」

問い返すと、レティシアはほとんど心外の様子で吐息を洩らした。

「あのなあ、王妃さん。俺たちや引退したとはいえ、元は玄人だぜ」

「王妃はよせ。それとこれと何の関係がある？」

「俺たちが相手にしてたのも人間だったってことさ。それも狙撃銃だの爆弾だの、こつちみたいに便利な殺しの道具はないんだ。目標に直に接近して相手に応じたやり方を考えなきゃあ話にならない」

ヴァンツァーが言葉を添えた。

「つまりは狙う相手のある程度の性格や嗜好くらい、すぐに見抜けなければやってられない」

だからこそ、教授の真の狙いにも気がついたのだ。リイは唸るように言った。

「で？ その変態は具体的にどんな好みなんだ」
シエラがぎよつとした顔になり、気がかりそうな様子でリイを窺った。

口に出せないシエラの懸念^{けんねん}を、くつきりした眼を煌^{きら}めかせながらレティシアがずばりと指摘した。

「あんた、なんか物騒なこと考えてないか？」

「おまえたちほど物騒じゃないはずだ」

要するに、その教授が生徒を脅迫^{きょうはく}していることが表沙汰になってしまえばいいとリイは考えたのだ。そのためにはそれなりの仕掛けと餌^{えさ}が必要だが、ヴァンツァーが不満そうに口を挟んだ。

「王妃。それでは順番が違う。単位の取得が先だ」

「黙ってる。そんな変態とまともに取引をしようと考えること自体、一般市民の発想じゃない」

「まともな取引のつもりはない。欲しいものを手に入れたら黙らせてしまうのだから。俺は教授を利用するだけだ」

「それも一般市民の発想じゃない」

レティシアが首を振った。

「どっちにせよ、あんたじゃ罫^{おとり}をやるのは無理だぜ。その教授はあんたみたいな若い子には興味がない。

今のヴァッツでも若すぎるくらいなんだ。本来なら二十歳過ぎくらいのもっと上でもいいかもな、いかにも頭の切れる感じの、もちろん貧弱^{ひんじやく}でもない、きれいな若い男が好みなんだよ」

「……世も末だ。そんな変態が若い男だらけの連邦大学で教鞭^{きょうべん}を取ってるのか」

「その点は俺も同意見。だから——そうさな、元の身体^{からだ}のヴァッツか、あるいはあののつぼの兄さんを見たら、いっぺんでのぼせ上がるはずだぜ」

「ケリー？」

リイは意外そうに問い返した。

「ケリーはだけど、そんな変態がいくら熱烈に愛を語ったところで歯^し牙にも掛けないだろうに」

「そうさ。あの教授じゃあ、どうがんばってもあの兄さんには歯が立たない。だから教授は兄さんには何もしない。色目すら使わない。だからたぶんあの兄さんも相手^{あひま}が変態だとは気づかない。あの教授、そういう外面^{そとづら}は実にうまくとりつくろってるからな。

自分の安全を考える保身本能もちゃんと持つてゐる」

「どういう意味だ？」

「どうやつても手の届かない高嶺の花と、ちよつと手間暇を掛ければ摘み取れそうな花があったとする。あんたならどっちを狙うかつて話さ」

リイは再び盛大なため息を吐いて、片手の親指でヴァンツァーを指した。

「意味はよくわかるが、摘み取られる花がこれかと思つと、何とも気色の悪いたこえ話だな」

「俺も非常に気色が悪い」

「おまえにそれを言う資格はない」

ヴァンツァーの苦情を一言のもとに切り捨てて、リイは首を傾げた。

「だけど……保身を考える変態がよりにもよつて、こんなものに手を出そうなんて考えるか？」

「眼の付けどころはばつちり合つてゐるじゃねえか。単位つていう餌をぶらさげてやればこいつは確実に釣れる、この取引に応じるって判断したわけだから。

俺はむしろ見る眼のある変態だと思つて」

ヴァンツァーが大真面目に頷いた。

「俺もそう思う。見る眼もねらい所も正しい。ただ、俺を『うまく落としたり』その後で自分が死ぬことになるとは夢にも思つていないだけだ」

リイは三度目のほとんど絶望的なため息を吐いて、片手で額を覆つた。

「おまえ、その小論文の複製、持つてゐるか？」

「部屋の端末にあるが——何故だ？」

「それが問題の根元だからさ。誰か第三者に見せて、本当はどのくらいの出来なのか判別してもらう」

ヴァンツァーは少し意外そうな顔でリイを見た。

「つまり、教授の態度は俺の思い過ごしで、正しい評価を下したと？」

「馬鹿言え。そんなはずがあるか」

相変わらず苦い顔でリイは言つた。

「おれはおまえが嘘を言つてゐるなんて思つてない。知りたいのはその変態がどのくらいの節操なしかだ。

実際にはCかCプラス程度の論文を無理やり落第にするならともかく、おまえのことだ。もっと出来はよかったはずだからな」

ヴァンツアーの濃い青の眼がちよつと丸くなった。そのまま首を傾げて黙り込んでしまふ。

思いがけず褒められたものの、どう反応を返していいかわからない様子だった。

レティシアがそんなヴァンツアーを肘でつついて笑って言った。

「ほれ、固まってるいで、さっさと取って来いよ。」

王妃さんも暇じゃねえんだ」

ヴァンツアーが無言で立ち上がる。

リイはレティシアに眼を移して話しかけた。

「おまえはその医学部の奴からもう少し詳しい話を聞き出してくれ。今までどんな奴が被害に遭ったか、その連中が今はどうしているのか、なるべく多くの情報を知りたい」

「あいよ」

立ち去り掛けたヴァンツアーが足を止め、リイを見下ろすようにして問いかけた。

「後で黙らせるではだめなのか？」

リイはじろりとヴァンツアーを見た。

それだけだったが、それで充分だった。

ヴァンツアーは即座に納得して頷いたのである。

「だめなんだな……」

「ものわかりがよくて結構だ」

「では、王妃」

「王妃はよせていうのに」

「何故だめなのか、理由を尋ねてもいいか？」

驚いたのはシエラだった。

リイはヴァンツアーの主人というわけではない。

だから命令に従わなければならない理由もない。

それでも、今のヴァンツアーは、こうして相談を

持ちかけたことからわかるように、リイの考えを

重んじて、自分の行動の参考にしようとしている。

この見知らぬ世界でリイを判断の基準にするのは

ある意味自然なこととも言えるが、それでいながら出された指示の理由を尋ねてくる。

そこに驚いたのだ。

何も考えず、疑問を抱かず、ただ言われる通りにどんな命令にも無条件に従う。自分たちはそういう生き物だったはずなのに、いつの間にかこんなことが言えるようになったのかと、むしろ不思議に思った。「おまえのしやうとしてゐることは誰に聞かせても正当性を欠いてゐると非難されるからだ」

リイはきっぱり言つた。

「おまえは教授のほうが先に条件を出したのだと、仕方がなかったと言ふんだろうが、それは通らない。端から見れば、おまえは落第するのがいやで教授と取引をしたと、つまりは被害者ではなく共犯者だと思われろんだ。わかるか？」

「わかる」

素直に頷いたヴァンツァーだった。

「わかるからこそ証拠が残らない方法を訊いたのに、

その質問には答えてもらえないか？」

「答えてるぞ。一番いい方法は取引をしないことだ。存在しない取引は発覚しない。発覚しないのだからおまえが警察に逮捕されることもない」

ヴァンツァーは黙つてリイを見下ろしていたが、少しばかり眉をひそめて再度尋ねた。

「変わった考え方だが、その点は了解した。しかし、俺の単位はどうなる？」

「だから、そのためにも複製がいるんだ」

強い口調で言われて、ヴァンツァーは無言で席を離れた。

相変わらず足音を立てずに食堂入口へ歩いていく。背中を向けて座っていたリイにはその姿が見えていたわけではなかったが、遠ざかるのを待つてから、疲れたように肩をすくめた。

「どつちが変わつてゐるんだか……。ファロットつていうのはみんなああなのか？」

シェラは困つてしまつてうつむいた。

小さな声で言う。

「わたしは、あれほど極端ではありませんが……」

「そうかあ？ 似たようなもんだぜ」

からかうようにレティシアに言われて、すかさずシエラがレティシアを睨みつける。

いつものことなので、リイはそれにはかまわずに卓上端末を操作して飲み物を注文した。

席に着くなり話を始めてしまったので（おまけに予想以上に重たい話だった）頼む暇がなかったのだ。運ばれてきた香ばしいお茶で二人が一息つくのを見計らってから、レティシアが言った。

「任務と単位は別だつて言うけどな。俺から見れば一緒にしてるところがあるよ」

「どうしてそんなものが一緒になるんだか……」

「何でもいいのさ。任務でも勉強でも、遊びでも。」

目標に向かつてとことん集中するのがあいつの趣味みたいなもんだからな。というより何かしてないと落ちつかないのさ——昔からそうだった」

茶器を持つシエラの指先がぴくりと反応したが、

リイは普通の調子で問い返した。

「そうなのか？」

「ああ、何もすることがない時、暇をもてあましている時なんかが一番しんどそうだったぜ。今も毎日提出物やら試験やらで眼が回るほど忙しそうだが、あいつにはそのくらいでちょうどいいんだろうよ」

「やっぱり変わった趣味だ」

「それは言っても始まらねえや。そのお嬢ちゃんはあんたにくつついてるのが趣味なんだろうしさ」

シエラが奮然ふんぜんとなつて言い返すより先に、リイがからかい調子に言った。

「そう言うおまえはどうなんだ。この頃ではいつもあいつと一緒にいるみたいじゃないか」

「そんなこたあねえよ。ただ、一人になりたい時はヴァッツに張りつくに限るけどな」

「それで一人になったことになるか？」

「なるね。あいつは俺が傍そばにいても全然気にしない。

もともと人を寄せ付けない霽^{ふん}開^{いき}気のある奴だから、

誰も近づいてこない。気楽でいい」

「虫除けみたいだな?」

「そうさ。ずいぶん見^み目^め麗^{うるわ}しい虫除けだ」

レティシアは笑つて首を振つた。

「昔はああじゃなかったぜ。俺が近づく度に身体を硬くしてたのに、今じゃまあ、すっかり開き直つて、ふてぶてしくなっちまつて、かわいくねえつたら」

「それなのに、変態だけは寄つてくる」

「ま、そういうことだ」

すぐ隣に人がいても聞き取れないほど小さな声で彼らは話していたが、リイはさらに声をひそめた。

「妻子持ちだと言ったが、奥さんはそいつの趣味を知つてるのか?」

「知つてる。女房だけじゃない。子どもも——今年十八になる一人娘も父親が同性愛嗜好だと知つてる。本人が話してる」

「それで、家族仲はうまくいつてる?」

「ある意味良好と言えるだろうな。女房とはずっと別居状態らしいが、お互い離婚する気はないらしい。名門出身の女房は夫に対する愛情はかけられないが、夫の名声と社会的地位は愛してる。だからパーティなんかにはちゃんと二人揃^{そろ}つて出かけてる。教授も若気の至りで結婚した女房は今さらどうでもいいが、女房の実家の影響力にはたつぷり未練がある」

「娘はどうなんだ?」

「今度のことに關しては話してもたぶん信じないぜ

——あの様子じゃあな」

「面識があるのか?」

「あんたの考えたことは俺も最初に考えたからな。

見てきたんだよ。メートランドの一年生だ」

「どんな娘だ?」

「見てくれは悪くない。有名教授の娘だつてんで、男どもに囲まれて女王さまみたいに振る舞つてたが、俺ならあんなのはお断りだね。いかにも高慢ちきで、鼻っ柱が強く、そのくせ妙に夢見がちなのだ。父

親の趣味にしても、変に隠そうとせずに堂々として格好いいなんて、うっとり考えてるらしい。そこに、おまえの父親は立場を利用して教え子に関係を強要しているんだ、なんて言ってみろ」

今はすっかり普通の生徒になりきっている死神は細い肩をすくめて苦笑した。

「ヒステリーを起こして手がつけられなくなるぜ。

自分と自分の父親の正義を絶対的に信じてるからな。あなたはそんな時代遅れの偏見へんけんで父を陥おとしれようとしているんでしょと眉をつり上げて叫ぶか、名誉毀損きそんで訴えると息巻くか、どっちかだろうぜ」

「本人はどうなんだろうな」

「うん？」

「そういう性癖はおれには理解も納得もできないが、個人の嗜好だからと割り切れることはできる。ただし、自由恋愛ならともかく、脅迫なんていう犯罪手段で関係を迫って何が楽しいんだか……」

「そりゃあ言うだけ無駄だ、王妃さん。あの教授は

自分のやってることが犯罪だとは思ってねえよ」

リイはさつきとは違うため息を吐いた。

「おまえもどうしてもその呼び方が直らないんだな。

おれの名前はそんなに言にくいのか？」

「言にくいどころか、そのお嬢ちゃんをよくまあ、あんたを呼び捨てにできるもんだと感心するぜ」

まんざら嘘でも冗談でもない口調だった。

「あつちは階級に厳しい社会だからな。身分の高い相手と呼び捨てにはできない。名前を呼ぶとしたら自分と同格以下の相手に限定される。まして相手が女なら、名前で呼ぶのは下働きの女中か、婆ばばあか、さもなくや自分の女だつて相場が決まつてる」

シエラの手が、ばん！ と音を立てて机を打った。白い顔が怒りのあまり紅潮こうしほし、紫の瞳に火花が散っている。

それを眼でたしなめておいて、リイは言った。

「おまえ、まだおれが女に見えるのか？」

「あんたはあんたさ。どんな身体をしていようとな。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。